

3. 寄稿：花と緑の手作り村構想 1988

(建築家、俳優 近澤可也)

群馬県の榛名山の西南斜面に、北軽井沢に抜ける国道 406 号、利根川の源流のひとつ烏川沿いに、倉渚村という今なお自然が残り緑と水と空気のきれいな山村がある。倉渚村も農業就業人口が減少し、高齢化が進み後継者も少なくなる過疎化の状況にあった。村では、村長を中心に豊かな自然、伝統、山村文化を守りながら、特色を生かした村づくりを目指していた。

近澤可也とパンデコン建築設計研究所は、倉渚村村長と「花と緑の農芸財団（理事長・長島茂雄 当時）」から計画立案の依頼を受け、村おこし計画「花と緑の手づくり村構想」（1988 年）を策定した。「花と緑の手づくり村構想」は、倉渚村の自然を守り、生かし、花と緑による村づくりであり、外部資本等に頼らない文字通り自分たちの手でつくる自前の村づくりである。

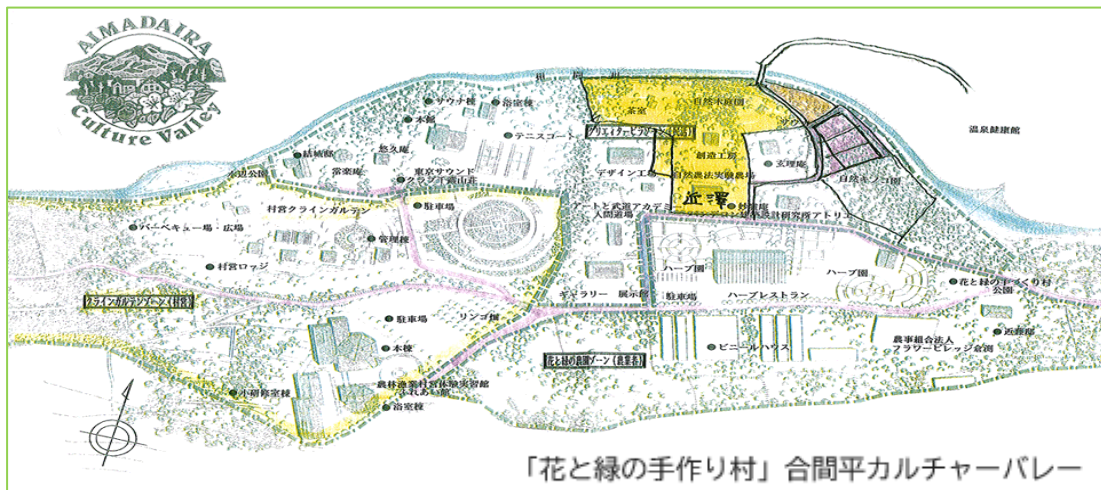
ヨーロッパにあるクラインガルテン（市民農園の一種、後述）を村の遊休農地に応用して村おこしを図れないかというアイデアで、地域計画建築設計メンバーは欧州各国を訪問しクラインガルテン（各国によって名称は異なるが・・）を視察した。研究、討論を経て、「倉渚村クラインガルテンシンポジウム」（1988 年）を開催し、叢智を結集し、計画は実行に移された。

烏川の支流相間川に沿って、「相間平(あいまだいら)」という畑、水田、休耕地などが混在している地区があった。相間川は相間平より上流は渓谷になっており、耕地、人家はない。計画地は行き止まりの袋小路の独立したひとまとまりの絶好の地形である。

私自身も倉渚村の自然、相間川の清流、村の人たちとふれあい、計画を実行することにした。ミヨウガ畑を譲ってもらい、ログハウスを建て「妙雅庵（ミヨウガアン）と名づけて、村での休息、活動の拠点とすることにした。山村の風景の中にログハウスが点在し、ここで私と同じような仲間たちが遊びと生活とを送ることができるようになれば素晴らしいことだと思った。相間平に、文化の渓谷をつくるという意味で「相間平カルチャーバレー」と名づけて計画はスタートした。



計画の拠点「倉渚ログハウス」



「花と緑の手作り村」相間平カルチャーバレー

この相間平地区のゾーニング計画として、「クラインガルテンゾーン」（村営）、「クリエータヴィラゾーン」（民活）、「花と緑の農村ゾーン」（農業者）とそれぞれ事業主体、事業目的の異なる三つのゾーンに分ける。「クラインガルテンゾーン」



は、村が土地所有者から農地を買い上げ、整備し、管理運営し、都市居住者に市民農園として貸し出すクラインガルテンを村営で行うゾーンである。

ところで、クラインガルテンとは何か？

クラインガルテンとは、ドイツ語で「小さな庭」という意味で、日本の市民農園に当たるのだが、その歴史、役割、機能は、日本でよく見かけられる市民農園とはイメージが異なる。ヨーロッパのクラインガルテンは、都市の周辺にあり、都市住民が仕事の帰りなどにちょっと立ち寄れるくらいの距離にあるものが多い。

日本型、倉渕型クラインガルテンの場合、ガルテナー（市民農園を借りる人）は都市住民であり、その居住地から離れたところに自分の農園があることになる。そうなるどうしても、宿泊する場所、食事をする場所が必要となる。

1991年、ログハウスのロッジ5棟、管理棟と体験農園25区画ができ、「倉渕村クラインガルテン」はオープンした。

1992年8月待望のクラブハウスが農水省の補助金により、「農林漁業体験実習館ふれあい館」として完成しオープンした。



都市と農村の交流を目指した村おこし研修館「ふれあい館」は、食堂・研修室棟、浴室棟、宿泊棟の木造3棟からなり、それを鉄筋コンクリートの渡り廊下でつなぐ。近くには貸し農園、「クラインガルテン」のクラブハウスなども存在する。また、古代檜風呂では茶色い濃い塩分の温泉が癒してくれる。

倉渕村はその後合併し、名称は高崎市となったが、「花と緑の手作り村」とクラインガルテンの理念と役割は生き続けている。「ふれあい館」は、温泉成分抜群の源泉掛け流し温泉「くらぶち相間川温泉」 <http://aimagawa.co.jp/log/index.html> として人々に愛され賑わっている。